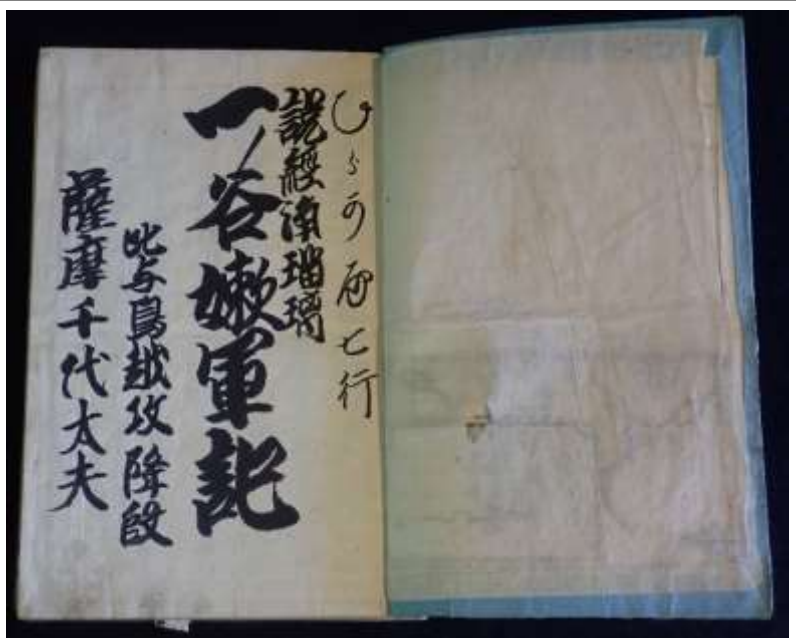




説経節台本「一ノ谷嫩軍記」

引間 隆文

現在放送中の大河ドラマ『鎌倉殿の13人』ですが、前半の山場とも言うべき源平合戦が早くも終わりを迎えました。義経の首桶に涙ながらに語り掛ける頼朝のシーンに思わず目頭が熱くなりました。



『平家物語』を筆頭に、古くから文学・芸能の世界では、源平合戦を題材とした作品が多数創られてきました。勇壮な合戦、平家の栄枯盛衰そして魅力的な人物など、どこを切り取っても魅力に満ちた題材は、人々の創作意欲を刺激して止まなかったのでしょうか。

今回ご紹介するのは、源平合戦のうち「鶴越の逆落とし」でお馴染みの一ノ谷の合戦を舞台とした作品「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）」の説経節台本です。これは明治 32(1899)年に説経師・薩摩千代太夫（本名：落合濱次郎）により書き写された説経節の台本です

が、もともとは義太夫節の作品です。作者は並木宗輔、浅田一鳥らで宝暦元（1751）年に大坂の豊竹座で初めて演じられました。当初は人形浄瑠璃（文楽）の演目でしたが、好評を博したことから後に歌舞伎などにも取り入れられました。

物語の前半は熊谷次郎直実と平敦盛の悲劇、後半は岡部六弥太と平忠度の和歌を通じた交流という2つのストーリーで構成されています。奇しくも直実・六弥太双方とも埼玉県ゆかりの鎌倉武士ですが、飯能との関連性では岡部六弥太が勝ります。例えば、市内三社にある我野神社は六弥太が再興したと伝えられていますし、坂石町分の法光寺は子孫が六弥太の菩提のために創建したとされています。

今日でも歌舞伎や文楽で同作品は人気の演目ですが、上演されるのは前半の一部分（「熊谷陣屋」）のみがほとんどで、六弥太が活躍する後半が上演されることは、残念ながらありません。確かにこの台本も直実に関する話のみです。確かに、前半の方が比較的ドラマチックなため仕方のないことかもしれませんが、飯能の人間としては少々寂しさも感じます。

大河ドラマにひょっこりと六弥太が出てきてくれると嬉しいのですが…。

※題名の「嫩」のつくりは「欠」が正式です。また「ノ」を記さないのが一般的です。

【参考文献・WEB サイト】

飯能市立博物館 図録『特別展 吾野～未来へつなぐ地域の記録～』平成 30(2019)年 10 月
日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」

<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc26/sakuhin/jidai1.html>